

[成果情報名] ‘きらび香’の心止まり株における低糖度果実発生低減技術の開発

[要 約] ‘きらび香’で頂花房と一次腋花房の連続出蕾による心止まり株が発生した場合、頂花房を3果に摘果する、あるいは一次腋花房を摘除すると低糖度果実の発生を防ぐことができる。また、CO₂施用は果実糖度を上げるのに有効である。

[キーワード] イチゴ、心止まり株、摘果、CO₂施用

[担 当] 静岡農林技研・野菜生産技術科

[連絡先] 電話 0538-36-1588、電子メール agriyasai@pref.shizuoka.lg.jp

[区 分] 野菜・花き（野菜）

[分 類] 技術・普及

[背景・ねらい]

‘きらび香’は連続出蕾性が強いいため、頂花房と一次腋花房が連続して出蕾して起こる心止まり株や一次腋花房と二次腋花房が連続して出蕾する心止まり芽が発生する。心止まり株は新葉が展開してこないため低糖度果実になり、ブランド化の障害となる。そこで低糖度果実の発生を低減する技術と高品質果実生産技術の確立を図る

[成果の内容・特徴]

- 1 心止まりのパターンは図1のとおりで、頂花房と一次腋花房が連続して出蕾して起こる心止まり株や、一次腋花房と二次腋花房が連続して出蕾する心止まり芽があり、2芽以上ある場合に心止まり芽が発生しても心止まり株にならない場合が多い。
- 2 頂花房と一次腋花房の連続出蕾による心止まり株が発生した場合、頂花房を3果に、1次腋花房を7果に摘花すると、糖度8%以上の果実が生産できる（図2）。また頂花房を7果に、1次腋花房をすべて摘除しても低糖度果実の発生を防ぐことができる。この際、CO₂を局所施用すると糖度はさらに上昇する（図3）。

[成果の活用面・留意点]

- 1 高設栽培「のびのびシステム」において、培土にヤシガラを用いて栽培した果実の結果である。
- 2 普通ポット育苗で花芽分化後定植し栽培を行った結果である。
- 3 果実は正形果を調査した結果である。

[具体的データ]

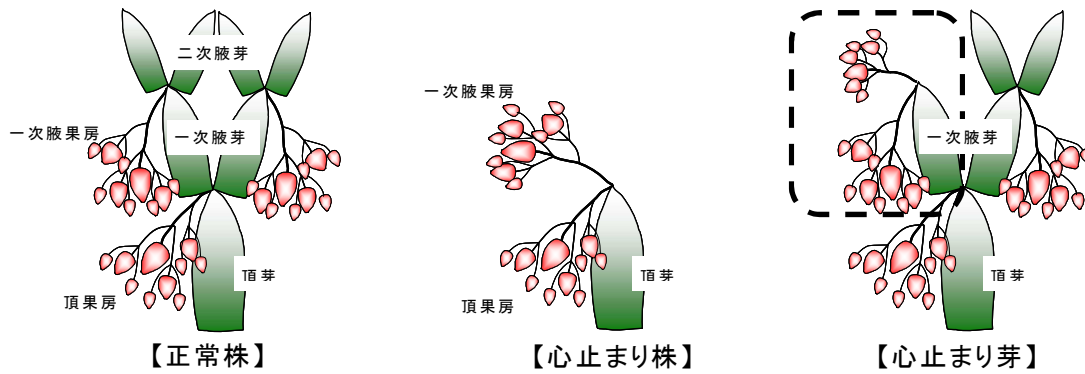


図1 心止まり株の模式図

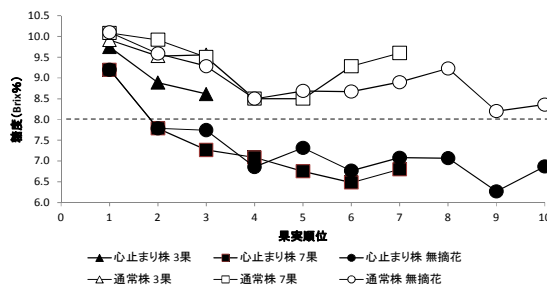


図2 心止まり株の頂花房摘果数が果実糖度に及ぼす影響

2014年実施。頂花房と一次腋花房が連続出蕾し心止まりとなった株と通常の株を調査対象とした。無摘果区は8g以上の果実を調査した。調査株すべてで8g以上の果実は第10果目までだった。一次腋花房は7果に摘花した。CO₂施用なし。

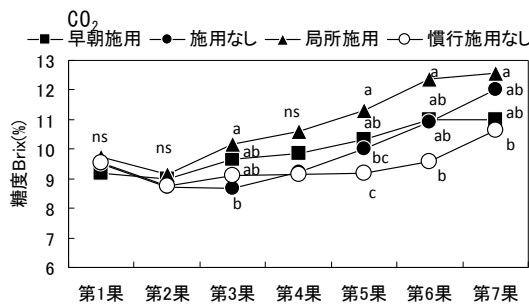


図3 心止まり株における1次腋花房の摘除とCO₂施用が頂果房果実糖度に及ぼす影響

2016年実施。早朝施用区は7~8時まで燃焼式で1500ppmになるようにCO₂施用した。日中局所施用区は早朝800ppmで日中は局所施用を日射比例で行った。施用なし区はCO₂施用なし、慣行区は心止まりのない株で、CO₂施用なし。頂花房は7果にし一次腋花房は摘除した。慣行区は頂花房を7果に、一次腋花房を7果に摘花した。
ns:有意差なし、同一英小文字間にTukeyの多重検定による有意差なし

[その他]

研究課題名：イチゴ‘きらび香’の安定生産技術の確立、静岡イチゴの「作ってよし・売ってよし・買ってよし」新ブランド創出と産業構造の変革

予算区分：県単

研究期間：2015~2017年度

研究担当者：井狩徹、河田智明、池ヶ谷篤、望月麻衣、長藤亮彦、菊池佑弥
発表論文等：